



私の知らないあなたについて

2022年/日本映画

配給：トリプルアップ/131分

2023 (令和5) 年1月21日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

監督・脚本・編集：堀内博志
 出演：佐々木ありさ/加藤小夏/水沢林太郎/平田雄也/遠藤健慎/吉村優花/東拓海/菅井知美/鈴木こうすけ/川連廣明/小西貴大/亀田侑樹/那波隆史

👁️👁️ みどころ

シネ・ヌーヴォはシネコンでは上映されない選りすぐりの名作を公開してくれることがあるから、それに巡り合うとチョー幸せ！しかし、ハズれてしまうと・・・？

監督も俳優も全然知らないが、思わせぶり(?)なイントロダクションとストーリーに惹かれて本作を鑑賞！数人の若者たちが織り成す青春群像劇ながら、これも思わせぶりな(?)邦題が提起する意味は？内容は？

全3章からなる壮大な構成とそのストーリー展開に期待したが、残念ながらアレ・・・。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

◆シネ・ヌーヴォは、シネコンで公開されない映画を選りすぐって公開してくれるから、時として、「これは大収穫！」と思える映画に巡り合うことがある。しかし、逆に思わせぶりの宣伝文句に釣られて鑑賞したものの、「何だ、これは！」と舌打ちしてしまうこともある。しかして、監督も女優も何もかも全く知らない中、宣伝文句に惹かれ、これは必見と前から定めていた『アメリカから来た少女』(21年)と共に本作を鑑賞したが・・・。

◆チラシによれば、本作の宣伝文句は、次のとおりだ。

パンデミック、世界、本当のあなた。
 無垢な魂は、孤独な想いを救う。
 「私はあなたに何が出来て、何が出来ないのか」
 独創的な構成で魅せる、魂の救済についての物語

また、公式ホームページの INTRODUCTION では、次のとおり紹介されている。すなわち、

INTRODUCTION

映画「私の知らないあなたについて」は監督・脚本の堀内博志が温めてきた構想7年の企画を、世界的に流行した新型ウィルスによるパンデミックに見舞われる現代を舞台に、今を生きる若者達の姿を映し出した物語である。全三章からなる重層的な物語の軸となる主人公・慶子を演じるのは、本作が初主演となる佐々木ありさ。ある出来事を機に変化して行く複雑な感情を持つキャラクターを見事に演じ切った。そんな慶子の親友である真美を演じた、加藤小夏。慶子を献身的に支えながら次第に自らの本質と対峙して行く大学生を可憐に演じた。真美の彼氏で劇団を主催する青年・拓也を演じたのは、平田雄也。理想と現実の間に思い悩む青年を落ち着いた演技で表現した。拓也の劇団の劇団員・和夫を演じたのは、水沢林太郎。無垢で飄々としながらも強い意志を持つ若者を見事に演じた。そんな彼等とは別のレイヤーで生き、やがて重なって行く青年・宮田を演じたのは、遠藤健慎。精神的・社会的に追い込まれて行く孤独な青年を演じ切った。それぞれが主演作を控えるなど、今後の活躍が期待されている若手俳優陣が集まり、他の出演者もベテランや名パイプラーが揃った、映画「私の知らないあなたについて」交差する若者たちの行き場を無くした感情の衝突とその先を描く青春群像劇が誕生した。

◆さらに、公式ホームページの **STORY** は、次のとおりだ。

STORY

就職活動中の大学生・慶子（佐々木ありさ）は、ある日、自分に想いを寄せていた人物が自死した事を知る。自分が原因だったのではと思ひ悩む慶子に、同級生・真美（加藤小夏）は彼氏・拓也（平田雄也）を介し、拓也が主催する劇団の劇団員・和夫（水沢林太郎）を慶子に紹介しようとする。だが、拓也に会った慶子は彼に特別な感情を抱いて行く。そして、日常の闇に潜むように生きる何者でもない青年・宮田（遠藤健慎）は、ある時慶子に出会うのだが……。

◆どうして、今ドキの日本の青春モノ、恋愛モノ、青春群像映画は面白くないのだろう。その第1の要因は、私が老人となり、微妙に揺れ動く若者の恋心を理解したり感じ取ったりする能力（感性）が薄れてしまった（失われてしまった）からだろうが、自分ではそんな自覚はない。むしろ、若い頃に観た石坂洋次郎原作の青春モノとか、吉永小百合、浜田光夫の純愛コンビによる青春映画の良さは、今でもしっかり感じ取っている。

本作は、慶子と真美の会話の中で、自分に想いを寄せていた人物が自死したことを知って、それが自分のせいではないかと悩む慶子の姿から始まる。なるほど、そんな現実が起これば、そんな悩みが生じるのは当然だが、そうかと言って、なぜ本作のようなストーリーになっていくの？それが私にはサッパリ……。

◆私は大学4回生を迎えるにあたって民間企業に就職する気が全くなかったが、本作を観ていると、大学生活後半の大半をシューカツ（就活）に使っている慶子や真美の姿がやけに目立っている。他方、真美の恋人、村木拓也は、それとは正反対の“食えない劇団主催者”として頑張っているが、その生計をどうやって立てているのかはサッパリわからない。そのうえ、はじめて会った拓也に対して、慶子がなぜあんなに奇妙な行動をとっていくのか、それが私にはサッパリわからない。

◆今年1月26日に74歳を迎える私は、正規の事務員とは別に、バイトとして週に1、2度、20歳前後の女子大生をパソコン要員として雇っているが、“無断欠勤”を含め彼女たちの仕事に対する姿勢は私にはサッパリわからない。なぜ、これができないの？なぜこうしないの？そんな思いに駆られることが多いが、今やそれを話しても詮無きこと、と割り切っている。しかして、本作を鑑賞している中、私はずっとそんな思いを持ち続けることに。

慶子は親友の真美から、自分の彼氏を紹介してもらうために、はじめて出会った男、拓也に対して、なぜあんな風にアプローチしていったの？慶子が本当に拓也に一目惚れしたのならそれもわかるが、私にはそれ自体がわからないから、その後の慶子の行動は全く不可解だ。そんな展開が、第1章に続いて第2章でも第3章でも。

女心は微妙なもの。そう言ってしまうればそれまでだが、何もこんなふうにはひねくり回した青春群像劇を作らなくてもいいのでは？そんな思いで、第1章、第2章、第3章と長々と続いていく本作をかなり我慢して鑑賞したが、ハッキリ言ってこの手の映画は No more, thank you !

2023（令和5）年1月24日記